

台湾の戦略的重要性

かわむらすみひこ
川村純彦 ● 本会理事
川村研究所代表



私が最初に台湾を訪れたのは海上自衛隊を退官直後の一九九一年の暮で、シーレーン問題の研究が出发点でしたが、特に一九九八年、李登輝總統から直接お話を伺ってから私の台湾に対する関心は大きく深まっていったことを覚えております。

岡崎研究所に籍を置いた私にとって、幸運だったことは最初に黄昭堂先生を紹介され、先生を通じて台湾の歴史を学び、そのご紹介によって台湾の方々との人脈が広がったこと、それに加えて当時の台北駐日経済文化代表処代表の羅福全、許世楷両閣下に親しくご交誼頂いたことです。

安全保障の研究においては、李登輝先生を始めとする信頼できる台湾の政治家や軍事・安全

保障の専門家の方々との密度の濃い意見交換や共同研究の機会が数多く得られ、それらの機会を通じて日台両国が運命共同体であるとの認識を一層深めたまま現在に至っています。また、それらの機会を通じて接した台湾の方々の国を思う心と建国に向かっての固い決意に強く心を打たれたことは忘れられず、今でも尊敬の念は変わりません。

ところで、好調な経済成長の下に急激に軍事力を増強した中国は、海洋での行動範囲を拡大し、「核心的利益」と称して南シナ海全域の領海化を図ると同時に東シナ海での軍事行動を活発化し、尖閣諸島の領有権まで主張するようになりました。

南シナ海は、資源獲得やシーレーンの安全確

保といった面だけではなく、中国にとって米国と肩を並べる軍事超大国となるための核報復力を獲得する上でどうしても手に入れなければならない海域なのです。南シナ海には水深三千〜四千米ートルで戦略ミサイル搭載の原子力潜水艦を配備するのに適した海域がいくつもあります。ミサイル潜水艦なら米国から核攻撃を受けても、その第一撃から生き残って米国土土に対して核ミサイルによる報復攻撃を加えることが可能なので、中国としてはその能力を持つことが初めて対米核戦力バランスにおいて米国と肩を並べることが可能となります。

もしこのような事態が起これば、これまで圧倒的に優勢であった米国の戦略核戦力の優越性、即ち核の傘の信頼性は相対的に低下し、米国の核の傘に全面的に依存する日台両国は中国の核による恫喝に直面した場合、いずれも深刻な危機に陥ることが懸念されます。

しかし、忘れてならないのは、中国のこのような狙いを阻止する上で最大の貢献をしているのが、南シナ海の北側から睨みをきかしている

台湾の存在です。中国は台湾をコントロールしない限り南シナ海を聖域化することも、有事に海軍が台湾から九州に至る列島線を突破して太平洋に進出することもできません。台湾こそが中国の超軍事大国化を阻む鍵を握っているのであって、この点からも日台両国が運命共同体であることは明らかです。日米両国は同盟関係を更に強化するとともに、価値観を共有する台湾の戦略的重要性を再認識して新しい対中戦略を構築し、日米安保と台湾の協力関係を更に深化させる必要があることに多言を要しません。

その意味で、日台共栄を目的とする本会の活動は極めて重要であり、昨年十月十六日の理事会において安全保障問題等について日台の専門家を交えた勉強会を開催し、その成果を提言することが可決されたことは、誠に時宜にかなった決定であり大変喜ばしく思います。

日米同盟が揺るぐことなく、そして台湾との協力を一層強化できれば、アジア・太平洋地域の平和と安定は必ずや維持されるものと確信しています。